

幼稚園

平成5年度

教育研究員研究報告書

幼稚園

東京都教育委員会

平成5年度

教育研究員名簿

主題	部会主題	区市名	幼稚園名	氏名
幼児が主体的に生活していくための指導の在り方	第1部会 幼児が遊びを進めている姿をどうとらえ、援助していけばよいか ——ごっこを通して——	中央 港 新宿 江東 世田谷 中野 北 練馬	阪本 三光 西戸山 ひばり 松丘 かみさぎ とよかわ 北大泉	◎ 寒河江 よう子 秋元 美佳 兼城 洋子 △ 森田 京子 村田 紀江 柴田 みどり 高橋 直子 阿部 アサミ
	第1部会 幼稚園において幼児が生活していくなかで、その子らしさを発揮するためには、どのような援助が必要か	新宿 台東 江東 品川 大田 渋谷 豊島 江戸川 日野	淀橋第三 松葉 浅間 第一日野 蒲田 広尾 南長崎 船堀 第三	△ 岩瀬 容子 平山 郁子 齋藤 敏子 □ 高橋 登喜子 齋藤 美佐子 福山 美喜代 嶋田 幸子 森 智恵 富尾 真須子

◎世話人 □副世話人 △記録

担当 教育庁指導部初等教育指導課長	小島 宏
教育庁指導部主任指導主事	寺崎 千秋
教育庁指導部初等教育指導課指導主事	岡上 直子
教育庁指導部初等教育指導課指導主事	井上 千枝美

研究に当たって

これからの幼児教育においては、社会の変化に主体的に対応し、人間として調和のとれた心身共に健全な幼児の育成を図ることが期待されている。しかし、幼児を取り巻く状況は生活環境が大きく変化し、遊び場の減少、少子化、同年齢の友達の減少などにより、人とのかかわりが希薄になってきている。また、幼児の生活や遊びを見てみると、自分で考えたり体を動かしたりすることをせずに済むことが多くなってきている。このような幼児を取り囲む状況を認識し、幼児教育の特性を踏まえ、今年度は昨年度に引き続き共通主題を「幼児が主体的に生活していくための指導の在り方」と設定し研究を進めることにした。研究に当たっては2部会を構成した。各部会の研究主題と研究の内容は次の通りである。

第1部会

「幼児が遊びを進めていく姿をどうとらえ、援助していけばよいか——ごっこを通して——」

幼児が主体的に生活していくためには一人一人が自ら興味をもった遊びに取り組み、のびのびと表現する体験を積み重ねることが大切である。幼児の遊びの様子を見ると、ごっこを楽しんでいるときに、自らの興味・関心を主体的に表現しているようにとらえられる。そこで、幼児がごっこをしている姿から、ごっこをどのようにとらえたらよいかを明らかにし、ごっこが充実するための援助について追究することにした。

第2部会

「幼稚園において幼児が生活していくなかで、その子らしさを発揮するためには、どのような援助が必要か」

今、幼稚園教育に求められていることは、幼児が主体的、創造的に生きていく資質を育てていくことである。幼稚園という集団生活の中で幼児一人一人がその子らしさを発揮することが大切であると考えた。そこで、一人一人の幼児がその子らしさを発揮するには、教師はどのような援助が必要なのかを探っていきたく考えた。創造する力、思いやる心、生きる強さなどの素晴らしい芽をたくさんもっている幼児がどのようにその子らしさを発揮しているのか、どのような援助が必要なのかを探り、主題に迫っていきたく考えた。

幼児が主体的に生活していくための指導の在り方

幼児が遊びを進めている姿をどうとらえ、援助していけばよいか

……ごっこを通して……

I 主題設定の理由

幼児は、身近な人々の生活やマスメディアからの情報に興味・関心をもち、自分の遊びのなかに取り込んでいる。また、自分を取り巻く環境に様々な方法ではたらきかけながら、周囲のものを何かに見立てて使ったり、その役になったつもりと言動を楽しむ姿が多く見られる。何かになりきったり、ふりをしたりして遊ぶごっこの中での幼児の姿を見てみると、幼児が様々なことを感じ、相手に伝え、自分の思いを表現しようとする姿がある。自分の思いを実現したりそれが周囲に受け止められたりすることによって、さらに次の意欲へつながら新たな活動を生み出していく。こうした遊びが繰り返され充実することによって、幼児は発達に必要な体験を得ることができる。そして、幼児は幼稚園生活を楽しいもの、自分を表現する場ととらえてのびのびと活動し、主体的な生活をする可以考虑。こうしたごっこが充実するためには、幼児が遊びを進めていく姿をどのようにとらえ援助していけばよいかを探っていくことが必要であると考え、主題を設定した。

この研究において、ごっこを「“見立て”や“つもり”の言動を伴い、自分のイメージを実現する遊び」ととらえることにした。特に、店ごっこ、遊園地ごっこのように、友達と共通のイメージや目的を意識して組織的に進めるごっこだけでなく、日常様々な場面で見ることのできる幼児の見立てやつもりを楽しむ遊びをごっこととらえて研究を進めることにした。

II 研究の方法

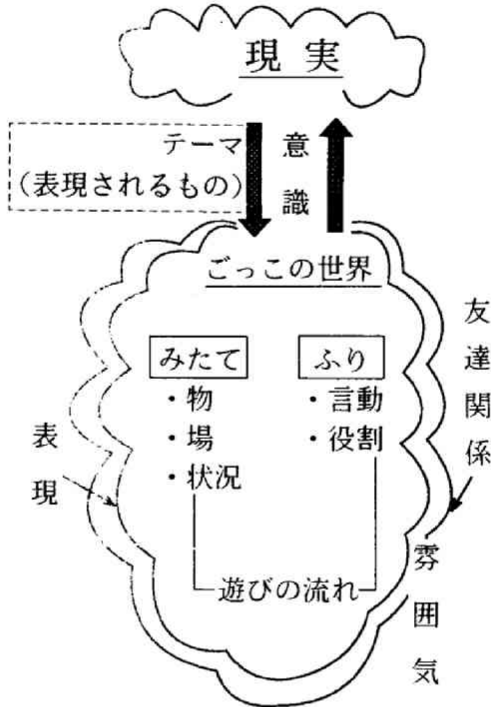
- 1 資料、文献等を検討し、ごっこについて共通理解を図る。
- 2 研究保育を行い、ごっこの構造について検討する。

観察の視点	・環境へのかかわり	・友達関係
	・遊びを進めるためのイメージ	・教師とのかかわり
分析の視点	・ごっこの要素	・個の育ち
	・集団の育ち	・教師の援助
- 3 「個の育ち」「集団の育ち」に着目して研究保育を行い、援助の在り方について考察する。

Ⅲ 研究内容

1 ごっこのとらえ方について

研究保育の観察記録や先行研究、資料、文献を基に、幼児が場や物にかかわって“ごっこ”を始めたり、進めたりしている姿から、ごっこの要素を探っていく中で次のことが分かった。



《個々の幼児において
ごっこの成り立つ要素》

図1

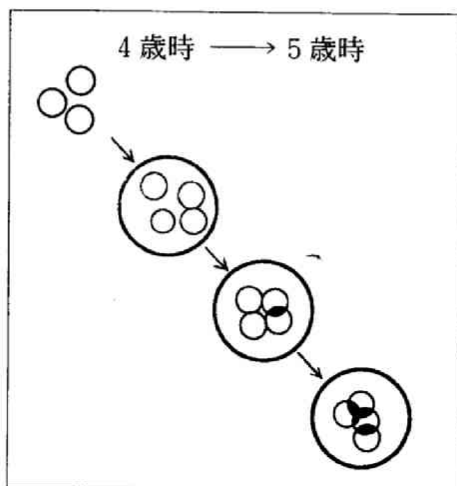


図2

幼児は、“見立て”や“ふり”（なっかつもり）の言動を通して、現実からごっこの世界へと入っていく。

この時、幼児は、憧れの対象の人物や状況の模倣等、あるテーマを自分なりの方法で表現していき、そこで場や物や状況を見立てたり、言動や役割のふりを表現することによって、遊びの流れを作り出していく。

また、遊びの中で、幼児自身がかもしだす雰囲気や様子が、学級内の幼児と相互に関連し作用しあうことによって、遊びがより楽しくなったり、充実したりするようになる。このように現実とごっこの世界を行ったり来たりしている姿を図に表わすと図1のようになる。

2 ごっこの取り組みの変容について

各々の幼児が、図1のように現実とごっこの世界を行ったり来たりしながらごっこを展開しているなかで、友達とのかかわり方については、発達に応じて次のような変容が見られる。

図2のように、見立てやふりを一人で楽しんだり、他の幼児とそれらが共通にならなくても同じ場で遊ぶ。そのなかで少しずつ個々のテーマが重なり合いながらふりや役割を決めたり場のとり決めをしたりするなど、友達とかかわりをもってごっこを進められるようになっていく。

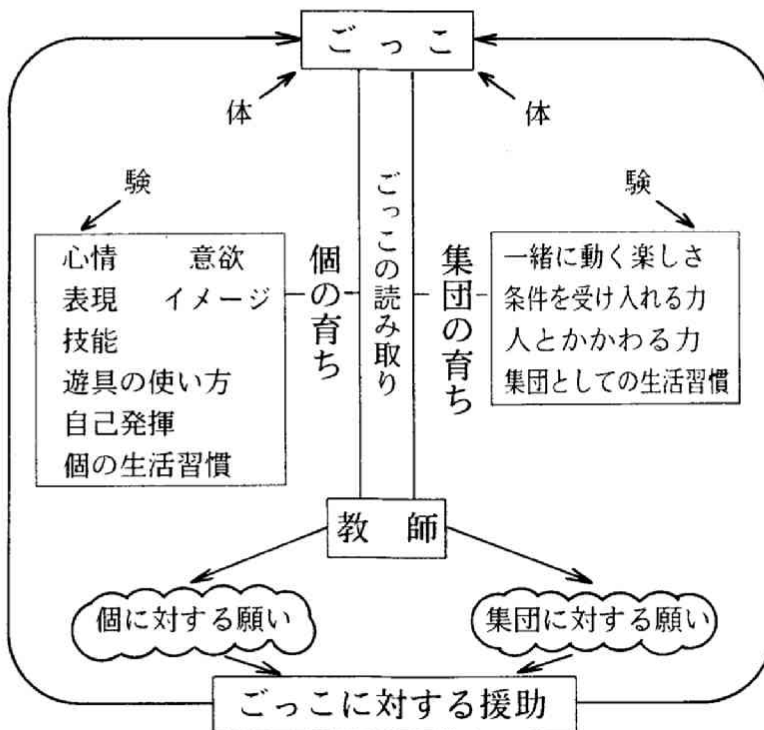
次第に友達とのかかわりが深まってくると、ごっこのテーマや遊びのきまりを自分たちで考えたり受

け止め合ったりするようになり、ごっこの見立てやふりの各々の要素は共通になり重なってくる。しかし、ごっこの流れの中で、あるいは、何日か連続して繰り返される中で、遊びが充実したり、停滞したりするなどして、要素のかかわり方は常に変化している。

また、図のように個々の要素が重なり合いながら、自分たちでごっこのテーマを模索しながら進めようとするグループ、自分たちの遊びのテーマをはっきりもちながら遊びを進めていくグループ、他のグループの動きやテーマを受け入れ自分たちの遊びに取り入れていくグループ等遊びの様子によって、ごっこの要素の重なり方は様々である。

3 ごっこに対する読み取りと援助について

幼児がごっこをしているとき、教師は、幼児の見立てやふりに注目することでごっこのテーマを理解し、援助についてとらえる手がかりとすることができる。グループで遊んでいる場面では、メンバーの一人一人がどのくらいごっこの世界に入りこんでいるのか、どの程度受け止め合っているのかを見極めていく。こうして幼児の姿を見ていくなかで、ごっこを支える土台として、身近な物を見立てて遊ぶ力や、なりきって動く楽しさを表現できる「個の育ち」と共にそれを受け入れ合える「集団の育ち」をとらえることが大切であることが分かった。個々の幼児の中に育っていること、グループあるいは学級全体の集団としての育ち



(幼児がごっこを展開していく時どのような援助をしていけば良いか。)

図3

がどうであるか、その状況を把握することによって、次にどのような体験が明確になるからである。そこで、個の育ちと集団の育ちをとらえた上で、育ってほしい願いをごっこの場面のなかで意図的に援助していく。さらに、このような援助を通して個々の幼児に何が育ってきているのか、個の育ちと集団の育ちの両面と、ごっこのつながりを考えながら、幼児の成長していく過程をとらえることで、次の援助が明確になると考える。

4 事例を通して援助の在り方を考える

① 見立てやふりがどのように共有されていくかをとらえる事例

——バブちゃんごっこ——

2年保育5歳児 6月

A児は男児の仲間と遊んでいたが、遊びのイメージの違いにより、遊びから離れ、廊下に積んであるマットの上でB児とかかわり始める。

幼児の動きと教師のはたらきかけ	分 析
①A児はマットの上に寝て、タオルを額に当てる。	①マットをベッドに見立てている。
②B児「A児ちゃん、セロハンテープ持ってきて」	(A児はごっこの中でみき子、B児はかお子という名前にしている)
③A児「バブ、(私は)みき子よ。」と言って寝る。	③赤ちゃんのつもりになっている。
④B児「みきちゃん、セロハンテープ持ってきて」	④B児はA児の赤ちゃんのふりを受け入れながら自分の要求を表す。
⑤A児「だめ、みき、熱が出ちゃったの」とタオルを額にのせる。	⑤A児は病気のふりをしている。
⑥B児「もうしょうがないわね。」と保育室に入る。	⑥A児が受け入れないのであきらめて自分で取りに行く。[現実]
⑦A児上半身を起こし「かお子(B児)」と言い、保育室に入る。	⑦B児のことが気になり、様子を見に行く。[ふり]
⑧B児はゼリーのカップにモールをセロハンテープで貼ろうとしている。	⑧製作をしている。[現実]
⑨A児「まだ熱が出てるんだ。」と独り言を言いながらままごとコーナーにある人形を抱き、B児に近付き「赤ちゃんいることでいい?」と聞く。B児は製作に集中し、反応がない。	⑨A児はB児を仲間ととらえているが、B児は対応に不安を感じ人形を示すことで、一緒に遊ぶ仲間だと、確認している。
⑩A児「お母さんごっこ?何ごっこ?」B児は反応せず、モールを付けることに集中する。	⑩⑪B児の反応がないので不安になり、遊び方や、遊びに必要な物で確認している。
⑪A児「お人形でいい?」B児「いいよ。」	⑪教師は役割の確認をしている。
⑫教師「バブちゃんのうちに家族が増えたわね。バブちゃん、お姉さん」と言う。	⑫A児はB児と双子の赤ちゃんになり、一緒に遊んでいることを教師に伝えている。[ふり]
⑬A児「バブ、私がみき子、B児がかお子、双児の赤ちゃんなの」と答える。 B児は作品を作り上げ、A児とごっこを始める。	

〈考 察〉

○A児は、友達と遊べなくなった不安定な気持ちを、赤ちゃん言葉や甘えたしぐさ等の言動で赤ちゃんのふりや病気になったふりをしながら安定させようとしている。A児にとって、つもりになったりふりをしたりする遊びは、楽しいだけでなく、困難や障害を乗り越える役割もあるのではないかと思われる。

また、A児は自分のイメージでB児と双児であると設定し、B児とごっこの世界を共有しようとしている。B児が製作に集中していてすぐには応じてもらえないが、自分なりに見立てやふりを楽しみながら、⑨⑩のようにB児が遊びに興味を示すように繰り返しはたらきかけている。このように、ごっこのふりをすることで友達を求めていることがわかった。

○B児は、製作に集中してA児のはたらきかけにすぐには対応しない。B児には、他に刺激があっても目的をもって取り組んだ活動は、最後までやろうとする姿勢が育っていることの表われと思われる。しかし、A児が見立てやふりでごっこの世界を楽しもうとして繰り返しかかわってくる姿に触れ、製作が一段落すると、A児の見立てやふりを受け入れ共有化してごっこの世界を楽しもうとしている。

★教師の援助について——事例では③⑤⑦のように、A児がそのつもりになりきってふりをする言動と、⑨⑩等役割を確認する姿が多く見られる。これが、B児のごっこへの参加を引き出している。このように、幼児がごっこの世界を友達と共有するときには、見立てやふりが大きな役割を果たしている。幼児が自分の見立てやふりを共通にしようとしているときには、その意図が相手に伝わるように援助することが必要である。この事例のように、A児の粘り強い誘いと、B児の自分の取り組んだ課題への意識などを考慮し、個に対する願いを明確にして見守る援助も大切である。また、教師が具体的な言葉をかけて援助するときには、相手が一緒に遊びたい気持ちを受け入れてごっこの世界を共有しようとするのか、あるいは自分の遊びを楽しもうとするのかを選択できるような配慮が必要である。

② 個の育ちと集団の育ちをとらえ、援助の方向を探る事例

——忍者ごっこ——

2年保育 5歳児 6月

登園するとすぐに、A児とB児が遊戯室で大型積み木を使って、忍者の基地を作り始める。2人は、互いにあまり言葉を交わさないで、囲いや屋根等を作っていく。基地ができ上がると前日に作っておいた盾に模様を付けたり、製作コーナーで剣作りをしたりする。C児も仲間に入り、剣作りをする。剣作りが終わり、3人は忍者の基地に戻ってくる。

幼児の言動(①~⑭ 10:35~10:45)

①他のグループの幼児(D児)が「海賊?」と聞くと、C児「海賊じゃない、忍者!」	⑬A児「武器は中に入れておいたほうがいい。」と積み木を動かし基地に入れる。
②D児「おい、B君こっち来い。」	⑭C児「ここに物置き作ろうぜ。」と言ひ積み木を取りに行く。
③A児「そんなの見なくていい。」と言って基地の中に入る	⑮C児「ここに剣とか入れようぜ。」
④B児は、D児に連れられ隣の基地に行く。	⑯A児「そうだな。」
⑤A児は、B児を抱きかかえて自分たちの基地に戻ってくる。	⑰A児剣と盾を取りに来たB児に「物置きはここ。ここに置けよ。」
⑥B児「屋根で寝る。」と横になる。	⑱B児「フーン。」
⑦遊戯室の電気が消える。直ぐに、また電気がつく。	⑲A児物置きの戸の積み木を動かし、「こうやって閉めればいい。」
⑧B児「夜なんだから」と電気を消しに行く。	⑳C児「そうだな。」
⑨A児「敵がくるからやばい。」「夜は敵がきやすい。」	㉑A児「いい考えだろう。」
⑩B児「俺が見張っている。」	㉒A児「朝になれよ、早く。」と言うと偶然電気がつく。
⑪A児「夜は、危ないぞ。夜はドアをしめるんだ。」と積み木を持って来る。	㉓A児「よし、朝になったぞ。」
⑫B児は、剣を持って基地の周りを回る。	㉔A児「B君、窓開けるからこっちこい。2人で開けなきゃできない。」

<忍者ごっこに対する読み取り>

4ページのごっこの成り立つ要素(図1)でこの事例を分析すると、次のようになる。

テーマ	忍者ごっこ(A児B児C児とも忍者になったつもりで遊んでいる。)
場・物	大型積み木で作った忍者の基地を中心に遊び、遊びに必要な剣や盾を製作コーナーで個々に作る。場や物を作り、見立てをしている。
状況	遊戯室の電気が偶然ついたり消えたりする状況を昼・夜に見立てて遊びの中に生かしている。
言動	忍者になったつもり動きや言葉が⑧~⑫に見られ、自分の思いを友達に伝えたり受け止める言葉や動きが見られる。その中で遊びの流れが生まれている。

5ページに示した個の育ち・集団の育ちなどについて分析すると、次のようになる。

〈経験している内容と個々の育ちの読み取り〉

	A 児	B 児	C 児
心 情 ・ 意 欲	B児を大切な仲間と思い、一緒に遊びたいという気持ち強い。⑤	A児C児と一緒に忍者になって忍者の動きや言葉を楽しんでいる。⑧⑩⑫	忍者ごっこの意識をはっきりもっている。① 新しい友達との遊びを楽しんでいる。
表 現 イメー ジ	夜という状況をとらえ、忍者になりきった言葉づかいや動きをする。⑨⑪	電気が消えるという状況を生かして、自ら夜の状況作りをする。⑧	自分の考えを言葉で相手に伝える。⑭⑮
技 能	3人とも大型積み木の使い方、剣や盾などを作るときの材料の選び方、ハサミ・マジックなどの使い方なども、手慣れている。		
自己発揮	B児に対しては、自分の気持ちをはっきりと出す。③⑤⑬⑭	周りが気になる。友達とのかわりが少ないので、自分を出せていない。	自分の考えをA児に伝え受け入れてもらえるように努力している。
生活習慣	遊びに使った剣や盾を整理することができる。		言葉で返事を返したり、相づちをうつ。

〈個に対する願い〉



友達の思いを受け止めると遊びが楽しくなるという経験をしてほしい。	遊びを進めていく楽しさを味わい、友達とのつながりをつけてほしい。	自分の思いがいろいろな友達に伝わる楽しさを体験し友達の幅を広げてほしい。
----------------------------------	----------------------------------	--------------------------------------

〈経験している内容と集団の育ちの読み取り〉

一緒に動く楽しさ	友達と忍者になりきって遊んでいて楽しい。
状況の変化を受け入れる力	偶然に起きた状況を遊びの中に取り入れ、生かし、遊びを進めていくきっかけにしている。
人とかかわる楽しさ	忍者になって自分の思いを出し合ったり、受け止め合ったりして遊びを楽しんでいる。
集団の生活習慣	友達と協力して安全に積み木を運んだり、構成したりする。

〈集団に対する願い〉



忍者になりきって楽しむ中で、自分の思いを出し合ったり、受け止め合ったりして、友達と楽しむ体験を十分にしたい。

〈考 察〉

幼児たちは「忍者ごっこ」という共通のテーマをもって遊びを進めている。見立てやふりなどのごっこの流れを生み出す要素が共通になり、友達の考えも受け止め合って遊びを楽しんでいる。

★教師の援助について——前ページに示したように個に対する願いや集団に対する願いを明確にし、それが実現できるように援助を工夫することが大切である。また、幼児が遊びをより楽しめるように、忍者の動きを引き出す場や物、状況等を教師も共に作り出していくことが必要と考える。

私たちは以上の2事例からごっこに取り組む幼児の姿を次のようにとらえた。

○幼児は、様々な思いをもって物や人にかかわり、現実からごっこの世界に入っていく。

幼児は、美しいものや強いものへの憧れや、体験したことを表現したい欲求から見立てやふりをして遊ぶ。このとき、自分一人でもなりたいたいものになりきって見立てやふりを楽しむが次第に自分がイメージしたことを相手を受け止め、友達と見立てを共通にして遊びを進めることを望むようになる。

○テーマが決まると場の見立てやつもりが、共通になりやすくなる。

事例1では、一緒に遊びたい友達を求め、何度も働きかけて現実とごっこの世界の間を行きつ戻りつしながらテーマを探している。事例2では、ごっこのテーマが共通になり、忍者になりきって動く楽しさを味わっている。そのなかで、自分の思いを相手に伝えたり、相手の思いを受け止めようとしている。

このように、グループによってごっこの取り組みや受け止め合いに違いが見られる。相互の理解については、これまでの生活の中での体験の積み重ねによるところが大きいと考える。特に「○○するときには、△△する」という遊び方を理解して、集団での遊びを楽しむ体験がごっこのつもりの共通理解にもつながり、ごっこの深まりに大きくかかわっていると考える。つまり、グループや学級集団での遊びを十分体験していることが、ごっこの充実にかかわっていると考えた。

そこで、ごっこを通して友達とのかかわりを楽しむとともに、集団での遊びを積み重ねてきた2年保育の年長児の学級で研究保育を行い、幼児のごっこが充実している場面をとらえて、集団の育ちとのかかわりについて考えることにした。また、研究保育に当たっては、今までの個々や集団での体験や援助の方針を明らかにして実践し、援助の方法をとらえることにした。

③ 集団の育ちをとらえ、援助の在り方を探る事例

2年保育5歳児 10月

○学級の今までのごっこにかかわる教師の願いについて

教師は、学級の幼児の実態から、次のような個や集団への願いをもち指導に当たってきた。

- ・遊びや生活の中で、イメージの世界の楽しさを十分味わってほしい。
- ・明るく開放的ながらも、けじめのある生活の中で、個々の幼児がありのままの姿を出し、自分で考えて行動する心地よさを、体得してほしい。
- ・人や動植物やものとじっくりかかわり、いろいろな出来事に出会い、下記のような様々な体験のなかで感動をしたり、共感し合ったりしてほしい。

☆個々に

- ・なりきる ・装う ・見立てる
- ・真似る ・必要なものを作って遊ぶ
- ・きまりや約束を取り入れる
- ・自分の思いや考えを言動に表現する
- ・相手の思いや考えを受け入れる



☆集団の中で

- ・集団の中で、自分なりに動く
- ・みんなと同じ動きをする
- ・揃えたり、唱和したりする快さを味わう
- ・ルールのある集団遊びを楽しむ
- ・役割を担って動く

〈当日の幼児の遊びの様子〉

ブローチ屋の家ごっこ

- ・A児、B児、C児が前日作ったブローチ屋と同じ場に家を作る。
- ・教師は、前日の続きをするととらえ「ブローチ屋さん、そろそろ始まるのかな」と声をかける。しかし、3人が、青いテープを湯に見立てて作ってあった風呂に入れたり、シャワー等を作ったりするのを見て、「もし、お店が開いたら知らせてください。買いたい物がありますから。」と言う。
- ・3人は、必要なものを作り終ると、母、姉、妹の役割をもち、そのつもりになって会話をしたり、風呂に入ってシャンプーをしたり、おやつにケーキを出したりするなどのふりをしながら、お家ごっこを続けている。
- ・他のグループのごっこに一人で行くときには、役から離れて個々の興味で参加し、3人で行くときは、ごっこの役のままの言動が見られる。

〈考 察〉

○集団の育ちについて——ブローチ屋の家という目的をもって場や必要なものを作る過程で、

ごっこのテーマが3人で共通になり、遊びが自分たちのものとなっている。ふりや役割を互いに受け止め合ってやり取りしながら、生活体験に基づいた家ごっこを楽しんでいる。また、他のグループの遊びに興味をもって参加しても、帰って来るとごっこの世界に戻って3人の遊びが継続する。これは、遊びを一時中断させてもまた遊びが続けられるという3人の相互の信頼感に基づいている。

★教師の援助について——教師は、前日3人がブローチを工夫して作っていた様子と3人の集団の育ちから、ブローチ屋としての援助を行った。しかし、3人の反応から本時の興味はブローチ屋の家の中での生活を再現することにあるととらえ直してかかわっている。

このように、前日の様子から今日の姿を見通して教師が働きかける際には、教師の集団に対する願いを表しながらも幼児が選択できるような働きかけ方をすることが大切である。そして、幼児の遊びに対する思いを確かめながら、援助の方向を修正して、幼児自身が遊びを進めて行くという意識がもてる働きかけをすることが大切である。

レストランごっこ

- ・D児、E児、F児がレストランごっこで、料理人とウエイトレスの役割をもって遊び、遊びに必要なメニュー、流し台、冷蔵庫等を空き箱や段ボール等を利用して作る。
- ・客の注文に応じて、ジュズ玉を米に見立てて研いだり、料理を作ったりする。
- ・新たに加わったG児に、D児が料理の作り方を教えると、教師は「よかったね」と言う。
- ・客から餃子の注文を受けたD児が、近くで別の遊びをしているH児に「H児くん、餃子作るの得意だろう。作って。」と言う。すると、H児は、釣り竿を作っている手を一瞬止め、D児の顔を見てから「売り切れって言って。今、忙しいから。」と答えて、釣り竿作りを続ける。

〈考察〉

○集団の育ちについて——このグループでは、客とやりとりをしたり、仲間へ必要なことを伝える関係が育っている。またD児とH児のやりとりから、日常生活の中で互いの得意なことが分かり、誰に対しても素直に思いや要求を出し合える関係が育っていることが分かった。この互いの力を認め合う関係の育ちについては、以前にH児が餃子を作っている姿を教師が見て、そのものらしく作っているのに驚き「すごい、本物みたい。お家でお母さんと作ったことがあるの?」と言っている。そのとき、D児たち周りにいた幼児も共感したことがH児の見立てや実現する力を認めることにつながっている。さらに、上記の事例では、H児は相手の遊びを理解した上で、遊びに沿った断り方をしている。一緒に遊んでいなくても、相

手の遊びの様子を分かって尊重し、互いに受け止め合っている。このことは、なりきる・見立てる・必要なものを作る・自分の思いや考えを言動に表現する・相手の思いや考えを受け入れるなどの体験を十分したことによる個々の育ちがあることを示している。また、集団の中で自分なりに動く・みんなと揃えたり同じ動きをすることの楽しさを味わう・役割を担って動くなどの体験による集団の育ち、集団の一員としての育ちがなされているからであると考える。

★教師の援助について——教師は、幼児がその物らしい素材を使っていることに対して「それ、いいね」「考えたね」等、認めている。また、新たに遊びに加わった幼児が遊びの流れに乗れてほっとしたときに、「よかったね」と一言だけ共感する言葉をかけている。

このように、友達とイメージや考えの伝え合いが十分にできるような集団の育ちが見られ、「自分たちでごっこの世界にひたり、受け止め合っている」ととらえた際には、教師はあまり介入せず、幼児が作りだすごっこの流れを大切にすることがある。

IV まとめと今後の課題

研究の推進に当たり、ごっこが充実するための援助を探っていくなかで、幼児がごっこを十分に楽しむようにすることと同時に、集団での楽しみの体験を積み重ねることがごっこの充実につながると考えた。そのなかで、次のことが分かった。

◎ごっこの状況をとらえたり援助の方向を考えたりするときには、見立てやふりなどの要素に視点をおいて見る。その際、次のようなことに留意して考える必要がある。

・幼児がどのような見立てやふりを楽しんでいるのか ・見立てやふりを一人で楽しんでいるのか ・友達とのかかわりを楽しんでいるのか ・テーマや遊びの方向について友達との共通理解がどの程度なされているのか ・どのように自分の考えを出し、相手のイメージや考えを受け止めて遊びを進めているのか などをとらえる。

◎ごっこが充実するための援助に当たっては、個の育ちや集団の育ちの両面からとらえ、これまでのどのような体験が今の見立てやふりの共有の姿につながっているのかを見極めて、それを生かす援助をすることが大切である。

◎グループや学級の一員としての意識を育てる体験が、ごっこの充実に大きくかかわっている。

この研究では、5歳の事例を中心にごっこの姿をとらえ、援助の在り方について考えた。今後は、集団としての育ちを見通して積み上げていく必要のある体験を、4歳から5歳の発達を踏まえて考えていくことが課題である。

幼児が主体的に生活していくための指導の在り方

——幼稚園において幼児が生活していくなかで、

その子らしさを発揮するためには、どのような援助が必要か——

I 主題設定の理由

今、求められている保育の考え方は、幼児の問題点を見つけることではなく、一人一人のよさや育とうとしている面をとらえることによって、発達が促されるという考え方である。どの幼児にも、その子らしい持ち味やよさがある。したがって、教師の役割は、一人一人の幼児のもっている持ち味やよさを見つけて生かしていくことである。そのためには、幼児の行動の仕方や考え方などに表れたその子らしさを大切にし、一人一人の幼児が自己を発揮しながら育っていく過程を重視することが大切である。また、教師は幼児自身が環境に主体的に働きかけ、自ら遊びをつくりだし自分で自分のよさを生かしていけるように援助していく必要がある。そこで、私たちは幼児一人一人のよさや可能性を引き出すことがその子らしさを発揮することであると考え、主題を設定した。

II 研究の方法

- ① 幼児が園生活の中でどのようにその子らしさを発揮しているかを探るとともに、その要因を研究保育を通して明らかにする。
- ② 学級集団の中で、その子らしさを十分に発揮するためには、教師の受け止めや援助はどうあったらよいか研究保育を通して探る。
- ③ その子らしさについて、研究文献、研究資料を参考にし、共通理解を深める。

III 研究の内容

1 その子らしさとは

幼児の活動する様々な場面を見ていると、思わず“ああ、〇ちゃんらしいわね。”と思うことがよくある。同じ環境の中で同じ刺激を受けても、それに対する反応は一人一人違い、その違いは、話し方・行動・表情など表現の仕方に顕著に表れる。それは、その子のその子らしさなのだろうか。一方、その子らしさに似ている言葉に「個性」がある。個性とは『個人に具わり、他の人とは違うその個人にしかない性格・性質』（広辞苑より）とある。その個人にしかないものをその子らしさととらえてみると、その子らしさとは、その子が生まれもった性質も含め、成長過程での家庭・地域社会・幼稚園・小学校などの環境において

影響を受けながら、成長とともにゆれ動き変容するものであると考えられる。しかし、芯である気質的な部分は、個人の生理的なものなので将来に渡っても変容しにくいと思われる。したがって、ここでは、その子らしさをとらえるに当って、幼児が周囲の環境から様々な刺激を受けて示す言動・感情の全てを見ていくことにした。

2 その子らしさの発揮とは

その子らしさを発揮するためには、まず、集団の中で自分を安定して出せることが大切である。そのことが基になり、友達の中で認められたり、認めたりしながら、幼児同士の持ち味が十分に生かされた時に、その子らしさが発揮される。幼児同士の持ち味が生かされるということは、自分を出した時に、それを受け止めてくれる教師や学級集団の在り方と深いかわりがあるのではないかと考える。

3 その子らしさを発揮していると思われる姿と要因

その子らしさを発揮していると思われる姿を“安定していて、生き生きと主体的に物事に取り組む姿”をとらえた。

また、そのための要因とし、内的要因と外的要因があるととらえ以下のように考えた。

(内的要因……幼児側の内面の育ち)

- ・人の愛情を感じられる
- ・自分に自信をもっている

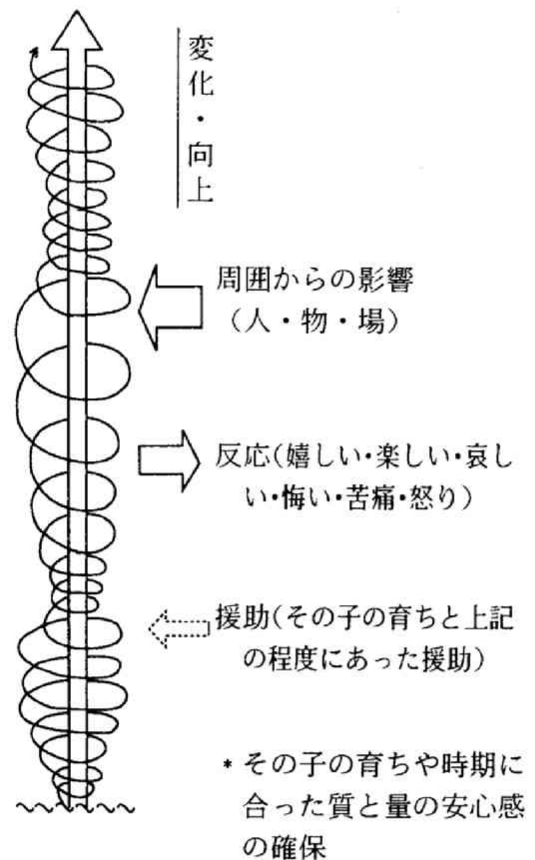
(外的要因……周囲の状況)

- ・まるごと受け止めてくれる教師がいる
- ・自分を出せる雰囲気がある(教師・友達・場)
- ・認めてくれる友達、モデルとしての友達がいる
- ・その子にあった課題がある

4 その子らしさが発揮されるための教師の役割

教師は、直接・間接的にその子らしさの形成に影響を及ぼしていることが多く、教師の役割は、非常に大切なものであると考えた。

〈その子らしさの形成と発揮〉



- 一人一人の幼児が愛情・信頼感を感じとれる関係が基盤であり、その関係づくりに心掛ける。
- その子の葛藤場面を見逃さず、的確な援助を行い、自信をもたせる。
- 一人一人の幼児と教師の関係・接触の仕方が、集団の育ちに及ぼすことを認識し、互いに認め合い、支え合う友達関係づくりを目指す。

5 事例を通して、その子らしさを探る

【事例1】教師の支えがあるなかで自分らしさを発揮するA児 2年保育4歳児 10月初旬

A児を中心とした幼児の言動と教師の援助	A児の気持ちの読み取り
<p>○登園後一緒に遊ぶことが多い、<u>入園前からの友達のR児</u>、3月<small>(安心して自分を出せる友達)</small>生まれのY児と3人でホテルを作る。</p> <p>○教師は、場面や相手によって友達を受け入れにくいA児に対し、遊びが楽しくなれば満足感から友達を受け入れるようになると考え、遊びの見通しをもたせようと、客としてホテルに入る。</p> <p>○Y児と一緒に教師に料理を出し、<u>客として振る舞う教師に笑ってうなづく</u>。<small>(受け止める教師)</small></p> <p>○R児の風呂作りを見て、<u>後から参加する</u>。作り終えて教師を呼ぶとY児も一緒に同じ動きをする。<u>教師に「ずっと泊まってい</u><small>(モデルとしての友達)</small><u>んですよ。」</u>と言う。<small>(受け止める教師)</small></p> <p>○教師が隣のケーキ屋に行くのを<u>笑顔で見送る</u>。他児にかわる教師を<u>穏やかな表情で見る</u>。<small>(人の愛情)</small></p> <p>○来る客に対してホテルの人になりきって世話をする。</p> <p>○R児の仕事を認めたり、話しかけてくるY児にきちんと受け答えたりする。<small>(自分を出せる友達)</small></p> <p>○A児にとって強い存在であるE児、F児、G児が遊びを見つられずにホテルに来る。</p> <p>○教師は、3人が他の遊びを妨げず、興味をもった遊びを楽しむように願い、一緒にホテルに入ってモデルになる動きをする。</p> <p>○3人が教師とかかわって喜び、はしゃいでいる様子を<u>ぎこちな</u><small>(雰囲気)</small><u>い笑顔で見る</u>。</p>	<p>○自分の思い通りに遊べる友達を選んでいる。</p> <p>○教師がかかわることを喜んでいる。</p> <p>○教師を求め、相手をしてもらいたがっている。</p> <p>○教師の対応で遊びの見通しがもて、自信をもって行動している。気持ちが安定してゆとりがあり、友達の存在を快く感じている。</p> <p>○3人が遊びに入ること、教師が3人にかかわることを快く思っていない。</p>

○教師が3人と一緒に食事を注文すると、冷蔵庫から料理に見立てた箱を取り出して、次々に教師に届ける。

○R児が同じように箱を取り出すと「これは、夜（の料理）なの！」と強引に奪い取る。箱が破れるとR児に文句を言う。

○3人がふざけて「酔っぱらっちゃったよ。」と騒ぎ始めたため教師は3人を遊びに引き戻そうと「酔っぱらっちゃったの？」と受け答える。

○教師の顔を見ながら3人の頭を後から強く叩く。

○教師は遊びが壊れるのを避けるため「もう治ったんだって。」ととりなす。A児は教師の言葉ですぐに叩くのを止めるが、ホテルごっこへの興味が失せ、ホテルの仲間や3人を含む周囲の友達に対して、うさ晴らしのように行動の邪魔をする。

○教師と3人に対する不満不快を表せず、それを自分より弱い存在の仲間に向けて八つ当たりする。

○嫌な気持ちを表すが、教師の反応を気にして十分に出せない。教師から止められたと感じて、我慢していた不満が爆発する。

<考 察>

① A児のその子らしさの理解について

- ・A児は常に教師とのかかわりを求めている。教師に認められることにより安定し意欲的に遊びに取り組み友達関係も良好になる。しかし、自分の思い通りにならず、不満を感じても、率直に表したり相手に伝えたりすることがなく、表す時でも教師の言動を気にしている。最後にはうっ積した気持ちを相手にぶついたり、友達に八つ当たりしたりする。このことから、A児は嫌なことを嫌と言えない気弱な面のある幼児ではないかと推察する。

② A児らしさを発揮していると思われる要因

- ・安心して自分を出せるR児やY児や自分の言動を受け止めてくれる教師の存在が、A児らしさが発揮される要因であると思われる。しかし、その関係もまだ薄いものであるので、自分が快く思っていない幼児が参加したり、その幼児に教師がかかわったりすることに不満・不快を感じA児らしさが発揮されないようである。また、教師に対して率直に不快感情を表せないことは、まだ十分な信頼関係がついていないためと思われる。

③ 教師の援助

- ・A児に対しては、他の幼児とかかわり援助するとともに、A児が、親しい友達との遊びが十分にできるように援助することが必要である。また、A児の表情や態度から、不満や不快な気持ちを受け止め、教師や友達に安心して自分を出していけるように援助することが必要と考える。

B児を中心とした幼児の言動と教師の援助	B児の気持ちの読み取り
<p>○30分遅れて登園し、遊んでいる友達の様子をしばらく見ながら、ゆっくりと身支度をする。持って来た絵本袋を背中に背負って保育室内をぶらぶら歩き回る。怪獣になって遊んでいたH児がB児の絵本袋を引っ張ると、B児はにこにこ笑いながら、絵本袋を置<small>(自分を出せる雰囲気、受け止めてくれる友達)</small>き「ギャオー、ギャオー」と声をあげて遊んでいるH児に大声で「ギャオー、ギャオー」と吠え返す。H児と一緒に遊んでいたO児、P児もやって来て吠え合う。B児もにこにこしながら大声で何度も吠え返し、怪獣になってH児と取っ組み合いの戦いを始める。</p> <p>○しばらくすると、折り紙をしているI児の姿を見付け、B児も折り紙を持って来てI児の隣で折り始める。I児が「ねえ、これどうやって作ったの？」と昨日B児が作った折り紙の犬を指差し聞く。<small>(認めてくれる友達)</small> <u>「ピンクの折り紙を三角にしてね…」と実際に自分がやってみせる。</u> <small>(自分に自信)</small> B児の様子を見ながらI児も自分でやってみたがうまくできず困っている。I児の様子を見て、<u>I児の手をとりながら「ここをね、こうするの、それでね、こうするの。」と教える。</u> <small>(自分に自信)</small> I児が折り終えると「<u>ここに絵を描いて、リボンをつけるの。</u>」とその次のやり方を教える。 <small>(自分に自信)</small></p> <p>○I児に作り方を教え終わると、次に自分のバックを作り始める。画用紙入れの中から「バックはこの色にしよう」と色を選び、<u>ズレないように丁寧に半分に折り、セロハンテープで両脇をきれいにきちんと止める。</u> <small>(自分に自信)</small> 折り紙で犬を折り、水性ペンで目、口、鼻、リボン等を丁寧に描く。<u>その犬をとれないように、また、ひらひらした所を確認しながらセロハンテープでバックに付ける。</u> <small>(自分に自信)</small> リボンを出し長さを確認しながら切り、<u>リボンの先をきれいにギザギザ型に切る。</u> リボンの切り落とししたものをすぐに拾ってごみ箱に捨てる。リボンを洗濯挟みで棚にしっかり止め、教師の所へ走って行</p>	<p>○登園時刻が遅くなり、周囲の友達の様子が気になる。H児がかかわってくれたことが嬉しく安心する。友達が「ギャオー」と言葉を返してくれるのが嬉しく、自分も怪獣ごっこの仲間に入りたい。</p> <p>○B児も折り紙を折りたい。I児が昨日、自分が作った折り紙を認めてくれて嬉しい。</p> <p>○作り方を知っている。自信のあるものなので、丁寧にI児に作り方を教える。</p> <p>○I児に作り方を教え終えたので今度は自分のバックを作りたい。</p> <p>○自分のイメージするバックを作りたい。</p> <p>○きちんと、きれいに作りたい。</p> <p>○ちょうどよい長さのバックにしたい。</p> <p>○作った物はきちんと保</p>

<p>き「できたよ。」と言う。「できたのね。」と教師に言葉をかけて <small>(受け止めてくれる教師)</small> <u>もら</u>うと走って元に戻り、また作り始める。「<u>今度はキツネ。</u>」と <small>(自分に自信)</small> つぶやき、折り紙でキツネを折る。</p>	<p>管しておきたい。 ○教師に認めてもらい嬉しく、再び作ろうとする。</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------

〈考 察〉

① B児のその子らしさの理解について

- ・遅れて登園し不安であったが、H児が絵本袋を引っ張った事でB児は安心し、遊び出せるきっかけとなった。また、B児の言葉に友達が反応してくれることにより、友達とのかかわりも楽しめるようになった。
- ・自分の得意な遊びだと安心して取り組み、友達に作り方を教えてあげられた。また、I児が自分の折り紙の犬を認めてくれたことにより自信をもって取り組むことができた。
- ・自分なりのイメージをもって、考えたり工夫したりしながら丁寧にじっくりと遊びに取り組んでいた。また、教師に認めてもらうことにより、更に作ろうとする意欲につながった。
- ・画用紙の折り方、セロハンテープの止め方、リボンの先の切り方などに几帳面さや、手先の器用さがうかがえる。

② B児らしさを発揮していると思われる要因

- ・まるごと受け止めてくれる信頼できる教師がいる。
- ・遅れて登園しても、自分を見ていてくれる友達や反応してくれる友達がいる。また、やりたい遊びができる材料や場の雰囲気がある。
- ・B児自身、自信をもってできる得意な遊びがある。
- ・B児の折り紙を認めてくれる友達や教師がいる。

③ 教師の援助

- ・教師との信頼関係を基盤に、B児がしたい遊びの楽しさを十分に味わえるように援助する。
- ・B児の自信をもった意欲的な姿を、学級の中に広げ、互いに認め合えるようにしていく。

【事例3】自分の得意とするもので、自分らしさを発揮するC児

2年保育5歳児

6月のC児を中心とした幼児の言動と教師の援助	C児の気持ちの読み取り
<p>○登園後、当番活動が始まったが、テラスのスノコの上げ下げを無表情でしばらくの間している。</p> <p>○C児と同じチャボの世話グループのS児に、一緒に当番を行うように促され、キャベツを取りに</p>	<p>○一緒に遊ぶ友達を見付けたいなど思っている。</p> <p>○S児に促されやる気になる。</p>

行く。所定の場所で、まな板と包丁を取り出し、手際よくキャベツを細かく切り始める。切りなが(自分に自信)ら隣にいたM児に「前にいた年長さんね、一緒に(自分を出せる友達、モデルとしての年長児)やる時、こうしてた。」とにこにこした表情で言う。

○切り終えた後「僕ちんこんなに(キャベツが)小さくなっちゃった。」と(自分に自信)言う。すると、S児がそばに寄って来て「ちょっと少ないんじゃないの」と言い、C児はすぐに「持って来よう。」とキャベツをもう一枚取って来て切る。

○C児が切り終わろうとしていた時に、教師が来て、「Cちゃん(固形の)餌は入れないの?」と言う。C児はそれに答えず「出来たら終わ(自分に自信)りましよう。」と言って、まな板と包丁を洗い、片付け園庭のすべり台に走って行く。

○10分後、同じグループの幼児たちがC児を呼びに来る。教師は「今、仕事が終わったのよ。Cちゃんは自分の切る事や片付けるのが上手だったんだけど、途中で遊びに行っていた?」と言う。C児は「よくない。」と一言答える。

○キャベツの切り方は、経験したことがあるのでよくわかっている。

○隣にいるM児と同じ場所で同じ事をしているのが、楽しい。

○自分で切ったキャベツが細かく切れたことに満足している。S児に言われ、まだ足りないのなら、もっと切ってやろうという意欲が出て、キャベツを取りに行く。

○教師の言葉かけに必要感を感じていない。

○まな板の洗い方、しまう場所などはきちんとよくわかっている。

○自分の仕事をやり終えた。

○自分の仕事が終わったので、遊んでもいいと思ったが、教師の言葉でグループとしての仕事が終わっていないことに気付く。



【教師の願いと援助】

自分の得意とする事を一生懸命行うC児だが、C児がもっと友達に積極的にかかわり、自分の得意とする事を友達に教えたり、自然にC児らしさを発揮できたりするようになって欲しいと思った。また、C児が今まで人から愛情を受けていると実感する体験が少ないのではないかと感じた。そこで、教師は積極的にC児にかかわり信頼関係をつけていったり、よさを認め自信をもたせたりして、その存在を学級にも知らせていくようにした。



9月のC児を中心とした幼児の言動と教師の援助	C児の気持ちの読み取り
<p>三つ編みのプロミスリング作りが始まった。はじめは自分からしようとしなかったが、<u>教師から誘いを受け</u>、 <small>(認めてくれる教師)</small> <u>作り方を覚えると、「これ、お母さんのにする。」と張り</u> <small>(自分に自信)</small> <u>切っていくつも作る。</u>教師が「<u>教えてもらいたい人がいるんだって。</u>」とC児に声をかける。仲良しのM児から「<u>C君から教わりたい。</u>」と言われ喜んで教える。 <small>(認めてくれる友達)</small></p>	<p>はじめは自分に作れるかどうか自信がなかった。教師から作り方を教わり、自信を持ち、母親にも作ろうと思う。またクラスの友達にも自分のできることを教えることができ嬉しいと思う。</p>

〈考 察〉

① C児のその子らしさの理解について

- ・6月の事例で、最初に遊ぶ友達を見付けようとしていたが見付からず、気持ちの落ち込みが見られた。当番を始めてからのC児は、キャベツを手際よく切る事を自信をもって行ったり自分で満足している気持ちを言葉に表したりしていた。しかし、自分の分担の仕事が終るとすぐに片付け、好きな遊びに移る面も見られ、友達への意識が薄いように思われた。
- ・手先の器用さが友達に認められるようになると、友達に喜んでかかわるようになる。

② C児らしさを発揮していると思われる要因

- ・キャベツの切り方やプロミスリングの三つ編みなど自信をもって作れるようになった姿から、自分に自信のあることで取り組むときに自分らしさを発揮している。
- ・受け入れ、認めてくれる教師や友達の存在がC児らしさをより発揮させている。

③ 教師の援助

- ・6月の事例では、自分から友達に積極的にかかわる姿があまり見られず、C児のよさが周りに伝わりにくかった。C児はそれとなく自分らしさを出しているが、それを受け止めてくれる教師や友達がいなかったようである。C児のありのままの姿を肯定的に受け止め様々なことに自信をもたせていくことが大切である。
- ・年長児ともなると、学級の中で認められ、学級の一員としての自覚をもつと更に自分らしさを発揮するようになる。一人一人の幼児が認め合い、支え合える学級にしていくことが大切である。

6 月の D 児を中心とした幼児の言動と教師の援助	D 児の気持ちの読み取り
<p>○登園後、D 児が遊びを見付けようと遊戯室へ行くと、「手をあげろ。」と言って、割り箸鉄砲を持って J 児が遊戯室に入ってくる。D 児が「変な剣。」と言<small>（自分を出せる友達）</small>うと、J 児が「剣じゃない。」と言り返す。D 児が「どうやって作ったの？」と聞き返す。J 児は、「教えてあげよう。」と言い、D 児と保育室へ行く。</p> <p>○J 児は割り箸鉄砲を作りながら、教師に「ぼくが D 君に作ってあげているの。」と言う。D 児は教師に「J 君に作ってもらっているの。」と言うと、教師は「そう、よかったわね。」と笑顔で言う。D 児は「<u>作り方、見てわかってんだもん。</u>」と教師に言<small>（モデルとしての友達）</small>う。</p> <p>○J 児は割り箸鉄砲を作り終えると D 児に「こうやってね。」とゴムの飛ばし方を教えてあげる。D 児は割り箸鉄砲のゴムを飛ばそうとするが、すぐにはできず数回後に偶然に飛ぶ。</p> <p>○D 児は<u>ゴムが飛ぶのが面白く何回もやっている</u>と、<u>セロハンテープがはがれているのに気付き、保</u><small>（自分に自信、満足感）</small><u>育室へ壊れた箇所を直しに行く。</u>その後、再び遊戯室へ戻ってくり返し遊ぶ。</p>	<p>○J 児の持っている物が欲しくなり、作り方を知りたいと思い、J 児に教えてもらおうと頼む。</p> <p>○J 児が自分のために作ってくれているという気持ちをもっている。D 児は自分は作っていないけれど見ていて作れると思う。</p> <p>○最初はゴムを飛ばせなかったが、偶然に飛んでおもしろいと思う。</p> <p>○鉄砲が壊れていることに気付き、進んで直している。自分でできたことに嬉しさを感じる。</p>



【教師の願いと援助】

自分なりに目的をもって遊べるようになってほしいと思い、D 児が自分から進んで目的を見付けられるように、D 児の興味や関心のあるものを教師と一緒に探し出し、教師の思いをつぶやいたりして、D 児なりにチャレンジする気持ちを育てるようにした。



9月のD児を中心とした幼児の言動と教師の援助	D児の気持ちの読み取り
<p>○運動会への取り組みのひとつとして竹馬に乗るという課題に学級全員で挑戦する。D児も<u>友達の刺激を受け、何度も挑戦するなかで、乗れるよう</u> <small>(自分なりの課題)</small> になり、<u>仲間や教師に胴上げをしてもらい大喜び</u> <small>(認めてくれる教師、友達)</small> する。次の日から「<u>今日も竹馬やろう。</u>」「先生、<u>ぼく今度、超高(一番高い)に挑戦するんだ。</u>」と <small>(自分に自信)</small> 意欲を示す。そして、まだ竹馬に乗ろうとしないK児を誘う。「俺だって、最初はできなかったんだぞ。」「L児(学級で一番上手)だって、できなかったんだぞ。練習しないと乗れないぞ。」とK児に何度も繰り返す、誘うように話しかける。</p>	<p>○「竹馬はこわいな」と思うが頑張ってみようと思う。</p> <p>○竹馬に乗れるようになり、先生や友達までと一緒に喜んでくれたことを嬉しく思う。</p> <p>○最初は誰だってできないんだから、頑張れば、僕のようにできるようになると思う。</p>

<考察>

① D児のその子らしさの理解について

- ・J児のように自分の感じたことを素直に言える親しい関係のなかで自分を出している。
- ・J児を窓口として遊びを知ったり、他の幼児とかかわったりしている。J児と同じ場で遊ぶことで安定した行動がとれる。
- ・自分の興味(目的)のあるものが見付かると、困難なことでもできるようになるまで行い、意欲的である。

② D児らしさを発揮していると思われる要因

- ・最初のうちはできなかった割り箸鉄砲や竹馬に何回も繰り返し挑戦することでできるようになり、自信をもって遊ぶようになった。
- ・練習をすれば絶対にできるという先行体験やまるごと受け止めてくれる教師や認めてくれる友達がいたことで、まだできない友達への誘いや励ましの言葉になっている。

③ 教師の援助

- ・D児の動きを見ながら、興味のあるものや、イメージを引き出したり、遊びのきっかけとなるような援助や遊びの目的がもてるようにしていく。
- ・友達とのかかわりのなかで、刺激を受けたり、教え合ったりしながら、相手とのつなが

りを感じとれるようにする。

IV まとめと今後の課題

その子らしさは、物や人、場によって今までの体験や生活環境でのその子の見方、感じ方、考え方が育ち、表現の仕方に表れると考えられ、人間形成の根本にかかわる課題であり、幼児を取り巻くすべてのものが深くかかわっていることがわかってきた。そこで、幼児の生活や遊びを豊かなものにし、多様な体験を積み重ねていくことがその子らしさの形成につながると思われる。したがって、環境の在り方や教師の役割は非常に重要でかかわり方や援助の仕方、学級経営にも深くかかわってくると考える。

① その子らしさの理解

- ・自分の好きな遊びや得意な活動に対しては、安心して取り組む姿が見られ、気持ちが表情や言葉によって表現される。しかし、自分をうまく表せずに友達に対して気持ちとは反対の言葉を言ってみたり、教師の対応を意識した態度であったり、など表面に表れている姿だけではなく、その背景となる内面の気持ちの受け止めも必要である。

② その子らしさを発揮していると思われる要因

- ・自分を出せる雰囲気がある。
- ・幼児の言動を肯定的に受け止め、幼児をまるごと受け入れる教師がいる。
- ・認めてくれる友達やモデルとしての友達がいる。
- ・実現したい自己課題がある。

以上の四つの要因は、人の愛情を感じられる、自分に自信をもつ要因に支えられている。

③ 教師の援助

援助の基本としては次の3点である。

- ・幼児の特性や傾向を教師が固定化して見るのではなく柔軟性をもって見る。
- ・一人の教師で評価するのではなく多面的に幼児をとらえる。
- ・幼児の姿を点で見るのではなく線でとらえ長期的に見る。

具体的な援助として次の通りである。

- ・幼児が自分を安心して出すことができるように、教師は幼児の気持ちやサインを受け止め、援助する。
- ・幼児のその子らしさを、認め合い、支え合える友達関係を学級の中で育てていく。
- ・幼児が自分の気持ちを素直に表せるような場や状況づくりをする。